The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	十九世紀後半における朝鮮半島の地理情報と海津三雄
Author(s)	小林, 茂; 岡田, 郷子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 2008, 42, p. 1-26
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8142
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

十九世紀後半における朝鮮半島の地理情報と海津三雄

小林　茂・岡田郷子

はじめに

筆者らは、一九四五年八月まで日本がアジア太平洋地域で作製してきた地図（「外邦図」）の研究に従事してきた。その過程で、二万種類以上に達するこれらの地図（小林、二〇〇六）のなかでも、とくに朝鮮半島に関連するものに注目することとなった。朝鮮半島では、他の地域にくらべて、早期より日本の地図作製が展開し、外邦図の作製過程を考えるうえでは、重要な地域となっているからである。既存の地図の編集によりはじまった朝鮮半島の地図作製は、やがて陸海軍の将校による主要交通路の実測とそれによる地図作製に発展し、さらに日清戦争を契機とする臨時測図部による大規模な地形図作製、そして併合後の土地調査事業における地籍図ならびに本格地形図の作製と、地図作製の精度の向上や範囲の拡大、さらには組織の高度化の段階的進行が、順をおいつつ検討できる（谷屋［岡田］、二〇〇四）。そうした点で、この作業は、朝鮮半島に関する地理情報の発展プロセスを追うだけでなく、日本の外邦図作製のひとつの典型を把握することにつながるといってもよい。

以下では、こうした朝鮮半島における外邦図作製のうち、初期の展開を一八八〇年代まで追跡することにしたい。

これに際し、その過程で活動した陸軍将校である海津三雄（一八五三〜？）に焦点をあわせ、その地図作製歴についても検討したい。近代地図の作製者、とくに測量に従事した者の氏名や経歴が知られることはすくないが、この段階ではその旅行ルートなどについても資料がえられ、他の時期では困難な作業が可能だからである。これによって、彼らの作業の具体的様相にまでアプローチできるわけである。

なお、この時期の朝鮮半島における日本の地図作製や日本軍将校の活動については、まだ研究がすくなく、村上（一九八一）やさらにそれを展開した南（一九九六）があるにすぎない。ここではこれらも参照しつつ、それがふれていない資料を中心に検討をくわえることとしたい。

なお、本稿の題名に示す地理情報とは、地図をふくむさまざまな地域情報をさしている。朝鮮半島の地理情報という場合、これまでしばしば議論されてきた朝鮮観や朝鮮イメージ（矢沢、一九六九、姜、一九九四）とは、大きくちがうものであることはあらためていうまでもない。それは、たとえば軍事行動をおこなうに際し必要な情報であり、その現場に関する詳細な知識でもある。

一、明治初期の朝鮮半島と地理情報の収集

まず明治初期の日本における朝鮮半島に関連する情報の把握、という点から見ておくこととしたい。いろいろな点からみて、この時期に日本には、まとまったかたちでの朝鮮情報はすくなく、とくに地理情報が不足していたことがあきらかである。以下、例はかぎられるが、その具体的様相からみていこう。

最初に、朝鮮半島の地理情報として、秀吉による文禄・慶長の役以来保存されていた地図までも収集しようとし

た点が注目される。一八七四（明治七）年七月、これに応じて、近世初頭以来保存してきた「朝鮮国繪圖」の写しを、三田藩士族が兵庫県を通じて献呈したところ、太政官正院はこれを「奇特」として報奨金を下賜している（アジア歴史資料センター資料、Ref. A01100072100「兵庫県士族野津茂朝鮮国絵図献上願ニ付伺」）。その添書では、この元図を、寄贈者の「家祖其藩祖九鬼嘉隆ニ隨従シ豊公征韓之役彼地ニ於テ所獲之地圖」とし、「八道切繪圖」で、「内地里程表」を付しており、ふつうにみられる地図とちがい、すぐれているように見受けられると述べている。各地方（道）を別々に図示する点や里程を示す点は、時期が一八世紀中期と大きくずれるが、『韓国の古地図』に掲載されている「東國地圖」（李、二〇〇五、一一四―一一七頁）と形式が類似するものであったと考えられる。

こうした古地図に関連して注目されるのは、日本海軍水路寮が一八七三（明治六）年十月に刊行した「朝鮮全圖」（国立公文書館内閣文庫蔵、一七五―一二二五）である。朝鮮半島全体を図示し、その付言では、前年の春日艦の航海のおりに朝鮮でえたもので、縮尺等に問題があるが、地名・島名がわかる、としている。ただしこの図は、北部の鴨緑江・豆満江上流の扁平な図形から、十八世紀中期以降になると減少する朝鮮前期の地図類型（李、二〇〇五、五〇五―五〇六頁）に属すことがあきらかであり、海軍水路寮には上記部分がより正確になる朝鮮後期の地図に関する知識が欠けていたことを示している。

このような状態からすれば、西欧諸国が作製した地誌や地図への関心がたかまるのは当然である。梶村（一九七九）が紹介する、フランス人神父、ダレ著の『朝鮮教会史』（原著仏文、一八七四年刊）への注目と翻訳のプロセスは、それをよく示している。すでに釜山の倭館に関連する交渉にたずさわったことがあり、その後の対朝鮮外交で活躍する花房義質（一八四二―一九一七）は、代理公使として榎本武揚駐ロシア公使とともにペテルスブルグに滞在したおり、

表1　ガストン・ガリーの奉献した朝鮮関係海図

番号	名称	年代等
1	ハンホーアフ図	1867年水師提督ローズの命によって作製
2	ヘルナンド島碇泊場ノ図	1867年同氏の命によって作製
3	ハミルトンルベー港ノ図	1845年刊行の図を1866年改正
4	ハンホーア碇泊場ノ図	1866年11月水師提督ローズの命によって作製
5	サレー（第一ノ河）河ノ図	1867年ローズの命によって作製
6	サレー（第二ノ河）河ノ図	1867年水師提督ローズの命によって作製
7	セウル（則ハンカン）河ノ図并に下図	1866年ローズの命により作製
8	ボアセー島并シエルー湊ノ図	1866年ローズの命により作製
9	セウル河南西部上陸場ノ図	1866年ローズの命により作製
10	アンビエ湾并ニエクスペジション及ヒノブゴルト小湾ノ図	1870年英国の製に倣う
11	朝鮮半島全図	1848年の製に係わる
12	朝鮮南部群島ノ図	1871年英国水師提督刊行図に倣う

資料：「千八百七十五年十一月三十日ジーガリーヨリ日本政府ニ奉献獻シタル朝鮮国東沿海図目録表」『翻譯集成原稿　第一號』（国立公文書館内閣文庫、一八六―一四三）

この『朝鮮教会史』の刊行を知った。早速フランスから原著を入手して、オランダ出身のお雇い医師、ポンペ（一八二九―一九〇八）に依頼して、オランダ語に必要部分を抄訳させ、さらにこのオランダ語訳を榎本が日本語に翻訳し、口述したものを花房が書き取って、はやくも一八七六（明治九）年に刊行している。この書物が当時としては比較的くわしい朝鮮半島全体を示す地図を付していたことも、注目された大きな理由である。

これに関連して注目されるのは、一八七五（明治八）年におこなわれたお雇い外国人であったガストン・ガリーのフランス製海図の献納である（アジア歴史資料センター資料、Ref. A01100094600「御雇仏人ガストンカリー朝鮮地図献納ニ付御賞賜伺」）。別の資料からわかる、その一覧を示したのが表1で、西欧語の地名が付されているものが多い。これには、朝鮮半島沿岸の測量が、現地住民側の情報なしにおこなわれた場合が多かったことが反映されていると考えられる。このうち七番は、国立国会図書館蔵（YG―アジア―乙―二―二八）の

Plan croquis de la rivière Hang-Kang ou de Séoul depuis son embouchure jusqu'à Séoul（72.5 × 104.5cm 日本語タイトル「漢江口ヨリ京城ニ至ル河圖」、ただし印刷図を手書きで模写）と考えられる。刊行は一八六八年であるが、一八六六年にRozeの命により作製と注記されている。一八六六年は、フランス人神父の布教活動に対する大院君（一八二〇―一八九八）による弾圧（「丙寅邪獄」）に関連したフランス艦隊の報復活動とそれに対する戦闘がおこなわれた年であり、一連の事件は「丙寅洋擾」と呼ばれている。フランス艦隊の一部は漢江をさかのぼって漢城（ソウル）に近いところにまで達し（李ほか、二〇〇六、四〇五―四一〇頁）、この図にはその測量結果が反映されている。

国立国会図書館には、表1の十二番に相当する可能性のある海図もみられる。Approaches to Seoul River および Salée River with the Fort Taken by a Force from the Asiatic Fleet の二図をあわせて掲載するもので（646 × 86cm、YG―アジア―乙―二―三二）、日本語のタイトルは「朝鮮國小陵河口近傍実測圖」となっており、やはり印刷図を手書きで模写したものと考えられる。両者とも多くの島嶼を示し、いずれも一八七一年に測量されたことを示す注記がある。Approaches to Seoul River にはさらに Rear Adml［Admiral］John Rogers のアジア艦隊によるものとし、両者が一八七一年の「辛未洋擾」の際の測量を反映するものであることがあきらかである。一八六六年に、大同江に進入して通商を要求した General Sherman 号への攻撃に対する報復として、一八七一年にアメリカのアジア艦隊の遠征がおこなわれ（李、二〇〇六、四一三―四一六頁）、その際に作製されたわけである。表1の注記とちがうことになるが、John Rogers の称号から、翻訳者が「英国水師提督」と誤訳した可能性が考えられる。

上記のような図は、いずれもサイズが大きく、とくに江華島付近から首都の漢城にいたるルートについて、多くの情報をもたらしている。上記古地図を提供した三田藩士族への報奨金が一円五〇銭であったのに対し、ガストン・

ガリーへの報奨金が五〇円であったのは、地図の数にくわえて、そうした情報に関する評価を示すものであろう。なお国立公文書館内閣文庫には、『朝鮮西海岸并ニ「セウル」河ノ通船実測書』と題する、上記フランス艦隊による水路誌の翻訳（一七八―四七六）もみられることを付記しておきたい。

以上、朝鮮半島の地理情報の入手のためにおこなわれた努力の例を示してきた。こうした状況にはさまざまな背景が考えられる。前近代にはこの種の情報がとぼしかったことも考慮する必要があるが（木部・松原解題、一九九七）、近世の日本では朝鮮外交は基本的に対馬藩が担当しており、とくに釜山におかれた倭館が情報の収集に重要な役割をはたしていた（諸、一九九七）という点にも注目しておく必要があろう。明治以後の新外交の展開にともない、こうした体制がくずれ、征韓論もあって、その不足がつよく認識されるようになったと考えられる。

ところで、このような情報収集の一方で、その蓄積や編集もおこなわれていく。その一つが陸軍参謀局編集の「朝鮮全圖」（一八七六［明治九］年刊、国立公文書館蔵［一七八―四八七］ただし明治八年刊のものもあるという［佐藤、一九九一］）である。134 × 97.6cmsと比較的大きな図で、中央部に朝鮮半島を百万分の一の縮尺で示し、左右の小さな囲みには「大同江」、「漢江口」、「ユンヒン湾」（元山付近）、「釜山浦」といった重要地域をやや大縮尺で示す。この素材となった情報については、左下の「例言」でつぎのように述べている。

此圖は朝鮮八道全圖大清一統輿図英米國刊行測量海圖等ヲ参訂シ之ニ加フルニ朝鮮咸鏡道ノ人某氏ニ就キ親シク其地理ヲ諮詢シ疑ヲ質シ謬ヲ正シ以テ製スル所タリ

この図にみられる緯度経度、海岸線は、イギリスやアメリカの海図により、内陸部は、朝鮮や清国の地図によった

と考えられる。このため、海岸の各所に西欧語のカタカナ表記と考えられる地名がみられる。

ところで、国立公文書館所蔵の「海軍海図」（ヨ五五八―〇〇八八）にみられる朝鮮半島の海図には、イギリス製やフランス製の図の覆版や日本側のデータもあわせて編集したものが多い。これらの刊行は「朝鮮全圖」の刊行よりややおくれるが、基本的情報は共通すると考えてよいであろう。

「朝鮮全圖」に類似するものとして「朝鮮江華島圖」（一八七六［明治九］年刊国立公文書館マイクロフィルム 01904100、リール番号、23900）がある。大蔵省紙幣寮彫刻局石版部が石版術の「習業」のため印刷したもので、凡例につぎのように述べている。

此圖ハ千八百六十七年佛兵此地ニ侵入ノ時中尉ヒユマン氏等測繪シ公刻セシモノヲ摸縮シ訂正シテ製セシモノナリ

上記「丙寅洋擾」に際しておこなわれた測量による原図をもとにしていることがあきらかである。

このような編集による地図作製の場合、海岸部については近代的測量による地図がえられても、内陸部については、類似する精度の地図がえられない、という問題が発生する。「朝鮮八道里程圖」（一八八二［明治十五］年？国立国会図書館［アジア乙二―一五］）は、これに対応するものとして作製されたと考えられる。八道を全四枚の図に示しつつ、最初の図（黄海道・京畿道・江原道を図示）につぎのような注記を掲載する。

本圖タルヤ明治八年出版朝鮮全圖ニ拠リ補スルニ道里標ヲ用ヒ各地ノ距離ヲ記入シ以テ梯尺ヲ用ユルノ煩ヲ省

クニアリ然トモ此原圖ハ素ト道里標ニ拠リ製スルモノニアラサレハ圖上自ラ距離ト里数トノ比例ヲ為サヽル者アルニ似タリ然トモ其何レカ非何レカ是ナルヲ判決スル甚タ難シ故ニ今暫ク改正ヲ加エス他日實地ニ就キ軌正スル所アラントス・・・

この注記は、記入された地点間の里数と図上にあらわれた距離にちがいがみとめられることをみとめつつ、より精度の高い情報を示そうとしている。なお、この図に示された里数は、さらに詳細な検討を要するが、「海東輿地圖」（十九世紀前期）に付載する里程表（李、二〇〇五、一四五―一四七頁）の数値に類似することを指摘しておきたい。

二、朝鮮開国に関連する交渉と地図作製

一八七五（明治八）年九月の江華島（雲揚号）事件、さらにそれにひきつづく日朝間の交渉は、朝鮮半島の地理情報の取得にあらたな局面をもたらした。使節団が漢城（ソウル）にはいり、直接地理情報をえる機会が飛躍的に増大したのである。

まずふれておくべきは、一八七六（明治九）年二月の江華島における日朝修好条規の締結以後、関連する規則の締結にむけた交渉が漢城で開始され（Kim, 1980, pp. 259-262）、これを担当した宮本小一外務大丞が、朝鮮製の「朝鮮全圖」をえるほか、漢城とそのまわりの地図（アジア歴史資料センター資料、Ref. B03030157500, B03030155000「陸軍士官朝鮮紀行」・「朝鮮都府略図」）を朝鮮側から借見したことである。随伴した陸軍大尉の勝田四方蔵と少尉の益満邦介（一八四九―一八九九、東亜同文会、一九三六、一二六―一二七頁）が写しを作製した後者の図では、漢城の城内を中心にまわりの山や河川が描か

図１　宮本外務大丞が朝鮮側から提供された図を写した「朝鮮都府略図」
資料　アジア歴史資料センター資料、Ref. B0303155000

れている（図1）。ただし、一八四〇年代刊行の金正浩による「首善全圖」（李、二〇〇五、二〇四―二〇五頁）と同じような構図ながら、はるかに簡素である。景福宮のような重要な場所でさえ概形を示さず、位置を円形の図形で示すにすぎない。勝田と益満は「梯尺ノ如キハ城郭内ハ概シテ一万分一ト為セハ甚シキ差謬ナカルヘシ然レトモ山河ノ大小ハ隨テ斟酌セサルヘカラス」と、図の中心部については縮尺を示すことができるほどではあるが、図の周辺部については検討を要すると述べざるをえなかった。

この使節団について、さらに言及しておきたいのは、朝鮮への出発にあたり、上記ガストン・ガリーの献納したものと考えられる地図十二枚と海図二枚を借用している点である（アジア歴史資料センター資料、Ref. B03030140000「5．携帯図書ノ借入及返付一件／2明治九年三月十二日から明治九年十二月二三日」）。江華島への使節団の輸送や開港地の探索などに、局地的にではあれ、詳細な地理情報が必要になっていたと考えられる。

上記花房義質が代表をつとめた、その後の使節団の派遣では、地理情報の取得はその主目的のひとつになっていく。一八七七（明治十）年に派遣された使節団は測量船高雄丸により、釜山から仁川湾まで各地で海岸測量をおこなった。その過程については、陸軍将校、海津三雄と下村修介の記した「明治十年朝鮮紀事」にくわしい（アジア歴史資料センター資料、Ref. B03030183400「1．高雄丸韓国沿岸測量一件／2．明治十年朝鮮紀事」）。高雄丸の海岸測量のおもな目的は、日朝修好条規に定められた開港地の選定で、日本船による沿岸測量は、やはり日朝修好条規で随時可能とされていた。なおこの場合、ロシアの水路誌（モルスコイスボルニク）の一八五五年第一号の摘訳を準備している点も留意されよう（アジア歴史資料センター資料、Ref. B03030183200「1．高雄丸沿岸測量一件／自明治十年五月至同十一年三月」）。

「明治十年朝鮮紀事」は、冒頭で各所での見聞を「英国海圖並ニ我海軍士官の実測図」で「裨補」しつつ記述し

たと述べているが、これらの海図は沿岸の航海や測量に際して、しばしば参照されものと考えられる。また現地では水先案内人を雇用している。なおこの記録は各所の説明のなかで付図があることに言及するが、残念ながらアジア歴史資料センターが公開しているもの（外務省外交史料館所蔵）だけでなく、国立公文書館内閣文庫のもの（二七一―三六二）にも、これが付されていない。ただしその多くは、見取り図のようなものであったと考えられる。

現在のところ、この高雄丸の航海に関連して作製されたとわかっている陸上の地図は、「従朝鮮國楊花鎮至濟物浦陸路見取圖」（国立公文書館内閣文庫、一七七―二二六、520 × 620cm）で、表紙には「明治十年冬代理公使（花房義質）彼ノ京ニ入リシトキ海軍士官児玉高杉等濟物浦ヨリ京地ニ往返シ該官等ノ圖セシモノナリ」（カッコ内引用者）と述べている。おそらく方位磁石で方位を確認しながら、歩測によって距離をはかり、作製したものであろう。また、日本人士官には、現地の案内人も同行したと考えられる。「明治十年朝鮮紀事」では、「濟物浦」の節で、「曽テ我海軍士官此処ヨリ陸行シテ漢城ニ到リシ者アリ途中山村僻邑ノミニシテ客舎ニ供スヘキ者ナシ更ニ辛酸ヲ極メタリト云フ」と述べている。海路朝鮮にいたって、漢城にはいるには、濟物浦からのルートは、江華島や通津からの伝統的な道にくらべ、よりみじかく、仁川開港後はこれがおもなルートとなるが、当初は施設がととのわなかったわけである。なお楊花鎮は、漢城に近い漢江の河港で、ここで漢江をわたり、漢城にいたるのが普通のルートであった。

「従朝鮮國楊花鎮至濟物浦陸路見取圖」でとくに興味ぶかいのは、表題の上記ルートは右下から中央下（南）部に小さく描かれるのみで、図の下（南）部左寄りに濟物浦や仁川、左（西）側上（北）部に江華島をえがき、そこから右下（東南）にむけて上記楊花鎮にいたる漢江の下流部を上記フランス海軍の作製した図にしたがって記入している点である。その構図からして、江華島や通津から漢城へのルートよりも濟物浦から漢城へのルートの方がみじかい

ことを示そうとしていることがうかがえる。

この点は、使節団が通津に上陸して漢城に移動する際に作製した「入京路程概測圖」（桜井、一九五九参照）の作製目的と比較すればあきらかである。花房義質は、この図の冒頭につぎのように記している（岩壁ほか編、一九九六？、リール二〇、四〇六、公文録・公信類）。

明治十年　月予カ始メテ京城ニ入ル時濟物浦ヨリ氣艇ニテ遡リ孫突頂ノ激湍ヲ経過シ控海門下ニ上陸シ通津ヨリ金浦ニ至リテ一泊シ楊川楊花鎮ヲ径テ京城ニ入リ清水館ニ至ルノ間ニ実測セシ圖也

随員山ノ城祐之カ輿中ニ坐シナカラ輿丁ノ歩数ト懐中時計ト磁石トニ依リ距離ト時間ト方向トヲ測リ其大概ヲ記セルモノナリ

此時未タ濟物浦ヨリ陸路仁川府ヲ径テ京城ニ入ルノ路アルヲ知ラス朝鮮政府指導ノマヽ通行シタレトモ此概測ニ由リ迂回ノ甚シキヲ知リ後日考究シテ直通ノ道ヲ見出シ当時使節往来ハ通津一路ニ限ルヘシトノ彼レノ提議ヲ論破スルノ料トナリシモノ也

この輿のなかでの測量は、おそらく随伴していた海津らの指導によるものと考えられ、それが後日、「従朝鮮國楊花鎮至濟物浦陸路見取圖」と統合されて、上記のような花房の主張にいたったと思われる。これは、一方で日本側の地理情報不足の状況を示すとともに、他方でその克服のためにさまざまな努力がおこなわれたことを示している。

花房義質は、一八七二（明治五）年の、倭館に関する交渉のため釜山に出張する際、外務省が米艦より借りいれた江華島の測量図五枚（上記のような、辛未洋擾の際に測量したものであろう）を随行員の遠武秀行に写しとらせたという（諸、

一九九七、六頁）。また、ダレの『朝鮮教会史』に対する注目やその翻訳作業への関与にも、地理情報への関心がうかがえる。代理公使として、釜山港ほか二港について開港場を選定するほか、日本の外交代表の首都駐劄についても課題をかかえていた花房にとって、「入京路程概測圖」のようなかたちで地理情報を得ることは、その職責遂行上、不可欠のことであった。朝鮮側との交渉に際して、花房が地図をしばしば提出したことが、「朝鮮國代理公使花房義質復命書」にあらわれるのは、それを示している（アジア歴史資料センター資料、Ref. A01000051300「朝鮮國代理公使花房義質復命書」）。ただし、花房の関心を、こうした実務上の要請だけから理解するのは、充分ではない。花房はさらに広い視野のなかで地理情報を理解しており、それは一八七九（明治十二）年四月の東京地学協会の設立にもつながっていく。榎本武楊などともにこの設立の中心メンバーとなり、発表のおこなわれる会合には毎回のように出席し、その運営を支えていくことなる（井上、一九三〇、石田、一九八四、八八頁）。

花房にとって五回目の朝鮮渡航になる、一八七九（明治十二）年の交渉では、元山の開港がおもな協議の議題となった。高雄丸および護衛の鳳翔艦の二隻で出発し、まず釜山に寄港して、そのご沿岸測量をおこなった。それに際しおこなわれた測量による地図のひとつが「朝鮮國鎮江略圖」（国立公文書館内閣文庫、一七七―二三三、50.2 × 121.2 cm）で、全羅道と忠清道の境界をなす錦江の河口部を示している。高雄・鳳翔は湾外に碇泊し、「小汽船」に花房以下随員が数十名乗り、調査がおこなわれた。開港の候補地を探すため、かなり内陸まで船を進めている。

もうひとつが「自古温浦至漢城略圖」（国立公文書館内閣文庫、一七七―二〇二、36.5 × 102.1cm）で、海津三雄らが一八七九年六月、南陽府の海岸（古温浦）に上陸し、水原をへて漢城までを測量したもので、縮尺を五万分の一と明記している（図2）。ただし海津らの通過は、先例がなく、また水原は「崇敬ノ土地」ということで、朝鮮側から一時期通

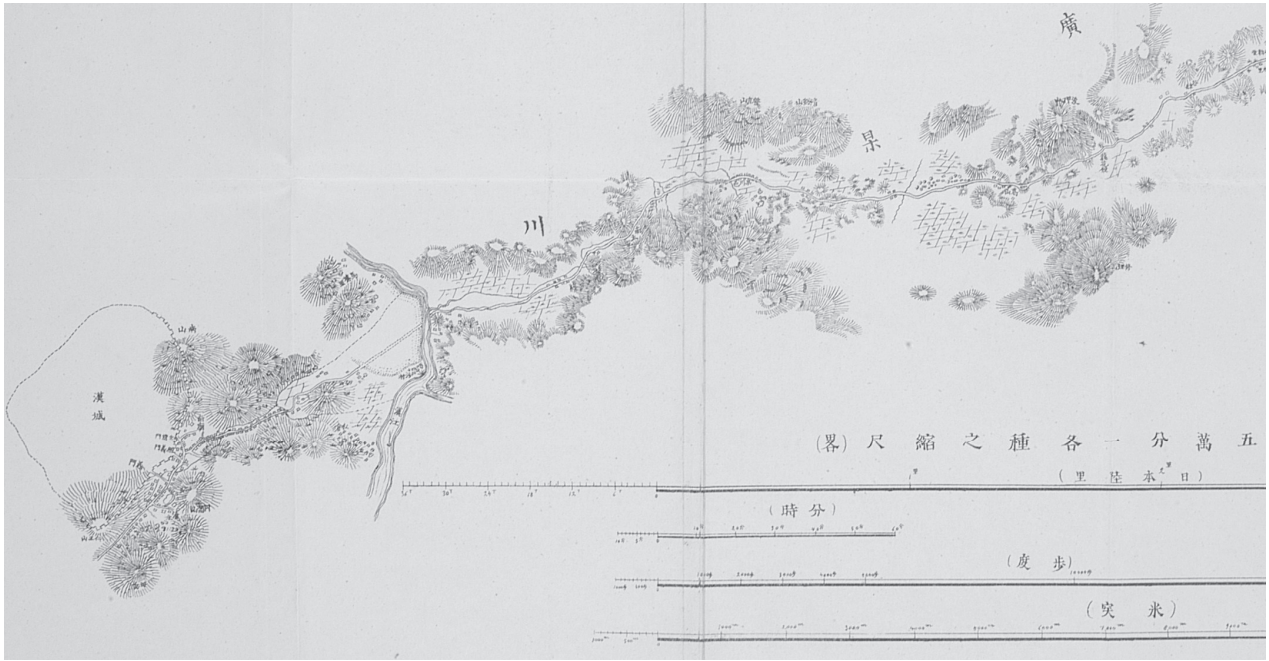

図２　自古温浦至漢城略圖（海津三雄 1879 年測図）
国立公文書館内閣文庫蔵（177-202）、36.5 × 97.2cm の左半のやや下部をトリミング（左端が漢城）
米突のスケールの１目盛りが 1,000m、図の左が北

行を差し止められることになった（広瀬、一九九六、アジア歴史資料センター資料、Ref. B03030245600「明治十二年代理公使朝鮮事務始末抜粋1」の「復命概略」）。漢城にいたるルートの探索でもあったと考えられる。

七月になると、海津はさらに漢城から済物浦にむけて歩き、「自漢城至濟物浦略圖」（国立公文書館内閣文庫、一七七―二〇一、33.4 × 90.0cm）も作製している。「濟物浦ニ至ル道路探知ノ為メ」と注記しつつ、済物浦に近づいたところで日没となり、それ以後については充分な測量ができなかったとしている。すでに海軍将校による測量がおこなわれていたのに、この調査がおこなわれたのは、どのような経緯によるのか不明であるが、前述の「従朝鮮國楊花鎮至濟物浦陸路見取圖」が、上記のようなかたちの図に仕立てられたのは、あるいはこの海津の図もふまえてのことであったかも知れない。

漢城での交渉のあと、使節団は東海岸の元山に回航し、交渉により開港が決定されたばかりの居留地予定地などを視察している。このとき海津は「元山津居留地略測并埠頭道路目論見圖」を作製している（海津、一八八〇）。

一八八〇（明治十三）年になると、日本公使館が設置され、さらに陸軍将校も配置されるようになる。一八八二（明治十五）年に派遣された水野勝毅陸軍歩兵大尉らは、「朝鮮京城圖」（四万分の一、国立公文書館内閣文庫、一七七―〇二〇七、60.0 × 48.8cm）を作製している。中央やや下に京城（漢城）市街を描き、上（北）方には要害である北漢山城を大きく描いている。また東から南、西にかけては漢江の流路（一部推定）も示す。注記として下記のような文章があり、まだ首都の地理情報さえ充分でなかったことがわかる。

此圖ハ朝鮮京城在留中北漢山城及ヒ南山白岳山圓喬山等ヲ跋渉シ目測及想像ヲ以テ漢城圖ヲ校正スル者ニ■固

表２　一八八二年までに作製されていた朝鮮関係地図

番号	名称	推定される作製者
1	朝鮮国八道里程図	
2	自漢城至済物浦略図	海津三雄
3	自古温浦至漢城略図	海津三雄
4	漢城図	水野勝毅ら
5	従江華島草芝鎮至江華府路上図	
6	従通津至漢城目撃図	花房義質ら
7	朝鮮江華島内江華府城図	
8	朝鮮地誌	坂根達郎
9	草稿抄譯	
10	従楊花鎮至済物浦図	児玉・高杉

資料　アジア歴史資料センター資料、Ref. C04030276800「朝鮮国八道里程図其外渡方照会」

ヨリ完全ノ者ニ非スト雖モ聊今日ニ裨補アランヲ希フ而已

同年七月の壬午軍乱では、陸軍中尉の堀本礼蔵が殺害されるほか、日本公使館が襲撃され、花房らは仁川、さらに長崎へと避難せねばならなかったが、それにつづく済物浦条約は、このような将校の地図作製に大きな転機をもたらした。公使館員の朝鮮内地遊歴がみとめられたのである。以後、朝鮮半島の内陸部の地理情報は陸軍将校によってそれまでにない範囲で蓄積されていくようになる。また日本公使館の護衛兵が派遣されることになり、彼らも漢城付近の地図を作製したようである（村上、一九八一、二〇―二二頁）。

ところで、一八八二（明治十五）年時点までに蓄積された地理情報をうかがう資料がある。砲兵局に入用ということで貸し渡された地図と地誌のリストで、表２に示すように、すでにみてきた図が主体をしめる。まだ朝鮮半島のごくわずかの部分に地図作製がおよんでいただけであったことがあきらかである（佐藤、一九九二も参照）。なお、ここにみられる『朝鮮地誌』は坂根達郎によるものと考えられる（坂根、一八八〇）。同書は冒頭に花房義質の明治十三年六月の書を掲載し、

各所に風景画を配置するほか、末尾には経緯度いりの「朝鮮國全圖」も付載する。朝鮮全体の概説にはじまり、京畿道から順に地理を概説しており、内容はともかく、趣旨は花房の考えにかなうものであったことに疑いの余地はない。どの程度普及したか不明であるが、外務省が一八七六（明治九）年に編集していた、箇条書きの『朝鮮國詳細』（アジア歴史資料センター資料、Ref. A03023622600）と比較すれば、そのちがいはあきらかである。

三、海津三雄の調査旅行と著作活動

以上、一八八二年までの朝鮮半島における地理情報の収集について検討してきた。すでに海津三雄は一八七七年以降何度か登場したが、つぎにその活動を中心にみていくこととしたい。まず、海津の略歴からみると、一八五三（嘉永六）年生まれで、幕臣の家の養子となり、静岡藩が設置した沼津兵学校に学んだ。のちに陸軍教導団にはいり、曹長をつとめたあと、一八七四（明治七）年に少尉となっている（樋口、二〇〇七、三二七、六〇三―六〇四頁）。朝鮮に派遣されたのは一八七七（明治十）年が最初と考えられる。一八七九年には、帰国したあと東京地学協会の会合で見聞を発表し、さらにそれが記事とされ、『東京地学協会報告』に掲載されることになった。

東京地学協会は上記のように花房義質らによって設立されたもので、欧米の列強諸国の各地で設立された地理学協会をモデルしていた（石田、一九八四、九一―一〇三頁）。海津の調査はつよく軍事的な目的をもっていたと考えられるが、会員制とはいえ、その見聞が雑誌に掲載されたのは注目に値する。同様の軍事的な調査の成果は、イギリスの地理学雑誌にも掲載されており（薬師、二〇〇六、一二五―一九七頁）、十九世紀後半のこの時期には、列強諸国のあいだでは許容されていたと考えられる。以下では、この概要についてみておきたい。

この第一は、一八七九（明治十二）年十一月二九日に発表された「朝鮮國漢城ノ地形概略」で、まず漢城（ソウル）の位置や来歴にふれたあと、市街地のまわりにそびえる山地の配置を述べ、さらに烽火台についてやや詳しく紹介する。朝鮮半島各地からの烽火による通信は、漢城市街南方の南山の烽火台に集約されるとしつつ、それらからの眺望のよさを指摘する。これに関連してつぎのような文章を示していることは、注目されてよい。

予屢當國ニ遊ヒ處々展覧セシニ韓人ハ所業ノ迂拙ナルニ係ハラス此烽燧臺ノ位置ハ全國實ニ其宜シキヲ得タリ仮令ハ一烽燧臺アリ其頂嶺甚タ高カラサルモ之ニ登リテ四顧スレハ眺望最モ妙ナリ思フニ後年全國大三角測量ヲ為スカ如キ日アルニ當テ此烽燧臺ヲ以テ標點ト為サハ大ニ其成功ヲ助クルコトアルヘシ（海津、一八七九a、八頁）

こうした、朝鮮半島の将来の植民地化への意識は、つづく部分にもあらわれてくる。漢城の城壁や城門、王宮の石郭、その背後の軍事施設である「北漢山城」の紹介は、それにむけた軍事行動に必要な情報といえよう。

ここでふれておかねばならないのは、朝鮮に同行した外務書記官、近藤真鋤も「鎮江記」と題する発表を同日に東京地学協会でおこなっていることである（近藤、一八七九）。上記「朝鮮國鎮江略圖」にみえる錦江河口部について、干満の差が三〇尺に達するなど、河口部の状況や集落について述べている。こうした海津や近藤の発表は、東京地学協会の幹部であった花房義質のすすめでおこなわれたものであろう。

海津はさらに一八七九年十二月二〇日にやはり東京地学協会の例会で「漢城風俗」と題する発表をおこなった。まず「丙寅洋擾」（一九六六年）と「辛未洋擾」（一八七一年）のあとに大院君が各地に建立させた石碑の排外主義的な碑文の紹介からはじめている。碑文の内容を時代錯誤的とするその紹介は、一八七五年の江華島事件のあと、朝鮮

の開国にむけて主導的な役割を果たした日本の軍人の自負ともいえる。

このあとには、人びとの服装や食習慣、家屋、農業、儀礼や社会にふれるが、末尾では「自國ノ政治ヲ外國ニ洩スハ國禁ニ係ルカ故ニ官民ヲ問ハス只不知々々ト云フノミニテ其詳ヲ知ル能ハス只外面ヨリ其一班ヲ窺フノミ隨テ歴史地理ノ如キモ其要ヲ得ル能ハス」（海津、一八七九b、一二頁）と、朝鮮の文化や社会に対して深い理解をえることのむつかしさを指摘する。

翌年の二月二八日におこなった発表は「元山津ノ記」と題するもので、長い交渉のすえに開港が決定したばかりの場所について紹介する。まず海図にみられる西欧語の地名、緯度経度について述べたあと、湾や島の配置についてふれ、さらにすでに確保された居留地の概況を述べている。さらに元山津が東海岸の一大中心地であることのほか、そこにあつまる産物、とくに海産物を紹介し、気候についてもくわしく述べている（海津、一八八〇）。巻末にはすでにふれた「元山津居留地略測并埠頭道路目論見圖」（七二〇〇分の一）が掲載されている。

以上は、朝鮮国内での旅行などがまだほとんどできない時期のものとなるが、海津が軍事的関心だけでなく、それ以外の側面についても関心をひろげつつ観察をおこなっていることがあきらかである。またそれが書かれた時期の日本と朝鮮との関係を意識しつつこれらを読む必要も感じられる。

済物浦条約以後の調査旅行と著作にうつろう。村上（一九八一、二二―二三頁）によれば、朝鮮国内の旅行がみとめられたので、日本側は磯林真三中尉、海津三雄中尉、渡辺述少尉の旅行を申請したが、公使館属員の磯林だけが許可され、領事館属員の海津と渡辺については許可されなかったという。ただし、一八八四（明治十七）五月三一日に東京地学協会で発表された海津の報告によれば、一八八三（明治十六）年六月から八月にかけて、元山を出発し、北

西にむかって中国国境の義州にいたり、そこから南下して平壌・漢城を経由して元山にもどる旅行をしており（海津、一八八四a）、許可はまもなく下りたと考えられる。

「朝鮮北部内地ノ實況、義州行記」と題するこの旅行記の冒頭で、海津は「蓋シ當國ニ於テ公然内地旅行ヲ試ムルハ壬辰ノ役後今回ヲ以テ嚆矢トス」と、秀吉の朝鮮侵略以来の旅行をおこなう自負を述べている。つづいて毎日の出発地、昼食地、宿泊地とそれぞれの間の里程を示す「義州往復里程表」を掲載している。すでに「朝鮮八道里程圖」についてふれたが、各地点間の距離の把握は当時の関心事であったことがうかがえる。つづいて「第一篇　地勢」では通過したルート沿いの地形や河川について順にふれ、「第二編　都府」では、やはり順に通過した中心地の立地や公的施設、市街地や商業を紹介する。つづく「第三篇　事情」各地での見聞や役人との接触やそれによる接待についてもふれている。この冒頭で、「當初徳源ヲ出ルヤ護照ノ明文ニ從テ本府派スル所ノ卒二人ヲ率ヒ……」と述べ、朝鮮側の下級役人が随伴していたことがわかる。また中国国境の昌城では、「同行ノ者」を派遣して、鴨緑江の対岸に渡らせ、中国側の様子を見聞させている。ただしこの「同行ノ者」は記述からすると日本人であった可能性も考えられる。

以上から、海津の旅行は済物浦条約にもとづく旅行であったことがわかる。この報告とつぎに述べる「朝鮮北部内地ノ實況第二回、慶興紀行」と題する報告が、一八九三（明治二六）年に刊行された『朝鮮彙報』（山中編、一八九三、二一七―二七三頁）に転載されたのは、このような旅行の性格によるかも知れない。

一八八三年十月から十二月にかけて、北東部の咸鏡道方面へおこなった旅行について報告したものが、上記「朝鮮北部内地ノ實況第二回、慶興紀行」で、東京地学協会では、一八八四年六月二八日に発表がおこなわれた（海津、

一八八四b）。ここでも、末尾に毎日の出発地、昼食地、宿泊地とそれぞれの間の里程を示す「慶興往復里程表」を示している。また咸鏡道について、摩天嶺を境に地域を大きくふたつに区分し、さらにこれらをそれぞれふたつに分けて記述をすすめている。このなかには中心地や交通、農地の肥沃度についての記述もみられる。

のちに述べるように、この旅行に際して、海津は通過したルート沿線の地図を作製しているが、測量をどのようにおこなったかについては、これらの文章だけではあきらかでない。また海津は、そのご一八八五（明治一八）年にも朝鮮公使館付になっており（樋口、二〇〇七、六〇三頁）、類似の旅行をおこなったと考えられるが、上記のような紀行文をまだ発見していない。

このような陸軍将校のおこなった旅行の成果を反映すると思われるのが、十万分の一で作製された「釜山近傍之圖」（第一号～第四号、一八八四年）「漢城近傍」図（第一号～第六号、一八八四年）、「元山近傍圖」（第一号～第六号、一八八五年）である（いずれも国立国会図書館、大山巌文庫六〇―二三、二四、二五）。このうち、「釜山近傍之圖」は渡辺が、「漢城近傍」図は磯林が、「元山近傍圖」は海津が担当したものであろう。いずれも主要ルート沿線について示し、その間には空白が多く、面的な測量にはいたっていない。

むすびにかえて

以上、明治初期の朝鮮半島における地理情報の収集とその発展について検討した。初期の模索段階から、欧米や朝鮮・中国の図を編集する段階、さらに外交交渉の機会を利用した実測の開始、そして長距離の旅行による主要ルート沿いの実測と、徐々に本格的な地図作製にむかって体制が整備されていったことを確認した。また朝鮮政府との

関係でも日朝修好条規による海岸測量の承認、さらに済物浦条約による公使館員や領事館員の国内旅行の承認と、順次条件整備をすすめてきたことがあきらかになった。

このようなプロセスは、単に陸軍だけによってすすめられたものではなく、外務省など、いくつかの政府組織にまたがるものであったこと、さらにかぎられた範囲ではあるが、東京地学協会で地理情報の一部が報告され、雑誌に掲載されるようになっていったことも留意される。この時期の対朝鮮外交で活躍した花房義質がそこで大きな役割をはたしたことは、その思想的背景もふくめ検討を要するといえよう。この場合、早期から朝鮮滞在経験をつみかさねてきた海津三雄の活動は花房の構想の実現にむけたものと位置づけられる。

ところで、済物浦条約以降、日本軍将校の朝鮮国内旅行にともなって作製された手書き原図が、ワシントンのアメリカ議会図書館に多数収蔵されていることが二〇〇八年三月に確認された（山近・渡辺、二〇〇八）。現在その調査を継続しているところであるが、同様の手書き原図が中国大陸や台湾についても見られ、その測量に従事した陸軍将校の報告が、やはり東京地学協会報告に掲載されている例を発見している（梶山、一八八三）。この場合は、旅行中に作製した地図までも縮小して掲載しており、当時の陸軍将校の調査旅行が、単に軍事的なことにとどまらず、他にもひろがっていたことをうかがわせる。ともあれ、これらの手書き地図から、彼らの旅行のルートや時期について、多くの情報を得ることが可能であり、今後も調査を継続したい。また、以上のような陸軍将校の地図作製の成果は、のちに二〇万分の一図として集成され、印刷されて日清戦争に利用されることになったと考えられる（山近・渡辺、二〇〇八）。今後こうした観点からも調査研究を継続し、外邦図としてのその役割をあきらかにしたい。

付記

本稿は、二〇〇六年八月、ソウル大学で開かれたPNC 2006 Annual Conference in Conjunction with PRDLA and ECAIで発表したKobayashi, S. and Okada, S., "Japanese military cartography in the Korean Peninsula, 1873—1910" および二〇〇六年度十一月の人文地理学会大会（近畿大学）で発表した岡田郷子・小林茂「植民地期以前の朝鮮半島における日本の軍用地図作製」、の前半部を発展させたものである。お世話になった外邦図研究会のみなさん、とくに防衛大学校の山近久美子准教授、渡辺理絵日本学術振興会特別研究員（筑波大学）に感謝したい。

なお、本研究には、科学研究費補助金（基盤研究A）「『外邦図』の基礎的研究」（平成一四―一六年）、同「アジア太平洋地域の環境モニタリングにむけた地図・空中写真・気象観測資料の集成」（平成一九―二〇年）、さらに国土地理協会の助成（平成一七―二〇年）（代表者はいずれも小林茂）を使用した。

文献

石田竜次郎（一九八四）『日本における近代地理学の成立』大明堂。
井上喜禧之助（一九三〇）「故副會長花房子爵」地学雑誌五〇〇、五七一―五七三頁。
岩壁義光・広瀬順晧・堀口修編（一九九六?）『花房義質関係文書、東京都立大学付属図書館所蔵』北泉社（マイクロフィルム）.
海津三雄（一八七九a）「朝鮮国漢城ノ地形概略」東京地学協会報告一（六）、六―一〇頁.
海津三雄（一八七九b）「漢城風俗」東京地学協会報告一（七）、三―一二頁.
海津三雄（一八八〇）「元山津之記」東京地学協会報告、一（九）、一―八頁。
海津三雄（一八八四a）「朝鮮北部内地の実況　義州行記」東京地学協会報告、六（二）、三―四一頁。
海津三雄（一八八四b）「朝鮮北部内地の実況（二）、慶興紀行」東京地学協会報告、六（三）、一一―二九頁。
梶村秀樹（一九七九）「解説」ダレ著・金容権訳『朝鮮事情』平凡社（東洋文庫三六七）、三三一―三五〇頁。
梶山鼎介（一八八三）「鴨緑江紀行」東京地学協会報告、五（一）、三―四五頁。
木部和昭・松原孝俊解題（一九九七）「松原新右衛門朝鮮物語」小林茂編『漂流・漂着からみた環東シナ海の国際交流』九

州大学比較社会文化研究科、五五―一〇一頁。
姜　徳相（一九九四）「近代日本の朝鮮認識」部落解放研究九六、三四―四三頁。
小林　茂（二〇〇六）「近代日本の地図作製と東アジア ――外邦図研究の展望 ――」*E-journalGEO*、一（一）、五二―六六頁。
近藤真鋤（一八七九）「鎮江記」東京地学協会報告、一（六）、一―五頁。
坂根達郎（一八八〇）『朝鮮地誌』大阪、前川源七郎他発売。
桜井義之（一九五九）「花房義質代理公使『入京路程概測図』について」朝鮮学報一四、三六三―三七九頁。
佐藤　侊（一九九一）「陸軍参謀本部地図課・測量課の事蹟 ――参謀局の設置から陸地測量部の発足まで ――（二）」地図二九（三）、二七―三三頁。
佐藤　侊（一九九二）「陸軍参謀本部地図課・測量課の事蹟 ――参謀局の設置から陸地測量部の発足まで ――（四）」地図三〇（一）、三七―四四頁。
谷屋［岡田］郷子（二〇〇四）『朝鮮半島の外邦図の作製過程』大阪大学文学部卒業論文。
東亜同文会編（一九三六）『対支回顧録（下）』（原書房、一九六八年再刊）。
南　縈佑編著（一九九六）『舊韓末韓半島地形圖』成地文化社。（解説の翻訳を外邦図研究ニューズレター四［二〇〇六］、八九―一〇九頁に掲載）
樋口雄彦（二〇〇七）『沼津兵学校の研究』吉川弘文館。
広瀬順晧（一九九六）「花房義質と『花房義質関係文書』」岩瀬義光・広瀬順晧・堀口修編『花房義質関係文書、東京都立大学付属図書館蔵［I］』北泉社、三―九頁。
村上勝彦（一九八一）「解説　隣邦軍事密偵と兵要地誌」『朝鮮地誌略1』龍渓書舎、一―四八頁。
諸　洪一（一九九七）「明治初期における日朝交渉の放棄と倭館」年報朝鮮学六、一五―三四頁。
薬師善美（二〇〇六）『大ヒマラヤ探検史 ――インド測量局とその密偵たち ――』白水社。
矢沢康祐（一九六九）「江戸時代における日本人の朝鮮観について」朝鮮史研究会論文集六、一四―三九頁。
安岡昭男（一九九六）「花房義質の朝鮮奉使」岩壁義光・広瀬順晧・堀口修編（一九九六？）『花房義質関係文書、東京都立大学付属図書館所蔵』北泉社、一一―三五頁。

山中峯雄編（一八九三）『朝鮮彙報』東方協會。
山近久美子・渡辺理絵（二〇〇八）「アメリカ議会図書館所蔵の日本軍将校による一八八〇年代の外邦測量原図」日本国際地図学会平成二〇年度定期大会発表論文・資料集、一〇―一三頁。
李燦著、山田正浩・佐々木史郎・渋谷鎮明訳、楊普景監修（二〇〇五）『韓国の古地図』汎友社。
李成茂著・金容権訳（二〇〇六）『朝鮮王朝史（下）』日本評論社。
Kim, Key-Hiuk (1980) *The Last Phase of the East Asian World Order: Korea, Japan, and the Chinese Empire, 1860-1882.* University of California Press

（文学研究科教授）
（文学部卒業生）

SUMMARY

The Accumulation of Geographic Information Concerning the Korean Peninsula by Japanese Military during the Latter Half of the 19th Century

Shigeru KOBAYASHI and Satoko OKADA

After the Meiji Restoration, Japanese military started accumulating geographic information on East Asian countries, for the prospected operations in these areas. In order to grasp the developmental stages of this process, present paper examines the early phase of cartographic works by Japanese military concerning the Korean Peninsula. Japanese military gradually scaled up this kind of activity in accordance with the development of the diplomatic relation with Korea.

In the 1870s, Japan had not reliable source of the information regarding Korea after the interruption of traditional diplomatic relation with this country. Japanese government procured not only charts made by French fleet during 1866 campaign to Korea but also old maps captured during the Bunroku and Keicho Campaign (1592-93 and 1597-98). The translation of *Histoire de l'eglise de Corée* by Charles Dallet (1874) into Japanese should be also mentioned as an effort to collect new information on Korea.

The first map printed by Japanese Army in 1876 was a compilation of the information from various sources. On coastline, it depended on British and U.S. charts, whereas Korean and Chinese maps were consulted on inland areas. The opening of diplomatic relation between Japan and Korea after the Incidence of Kanghwa Island (1875) provided new opportunity for surveying inlands. Japanese officers, who attended delegates, tried surveying the routes from the coast to Seoul.

After the Korean Soldiers' Riot in 1882, Korea met Japanese request to permit diplomatic personnel traveling in inland areas. Japanese army officers surveyed as diplomats the main routes of Korea, measuring distance by pacing and finding azimuth with compass. The results of the survey were compiled into 1:200,000 maps covering whole area of Korea up to 1894, when the Sino-Japanese War was started.

keywords: Japanese military, Korea, geographic information, map, survey